

# 日本IT書紀

190 情報化元年

10 迅風篇  
卷之二十六 草昧

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第九百九十

情報化元年

一

「情報化元年」

この言葉は平松守彦が生み出した。

一九七〇年五月の通常国会で「情報処理振興事業協会等に関する法律」が成立し、同月二十二日に公布された。六月三日付でソフトウェア産業振興協会、同月二十二日に日本情報センター協会が相次いで設立され、「業界」の基本的な枠組みが整った。

七月一日、通産省に「情報処理振興課」が新設され、同時に港区虎ノ門の富士銀行虎ノ門支店三階に情報処理振興事業協会（IPA）準備室が設けられた。

情報処理振興課は設置されたものの、課長が未定という見切り発車に近く、このため平松がその課長を兼務した。

IPAも同様であって、法律が五月二十二日付で施行されたものの、基金が集まっていなかった。情報処理振興課に配属された業務班長の山路開造がIPA準備室長を兼ね

るという状態だった。

デュッセルドルフの日本貿易振興会（JETRO）トレードセンターで六八年から所長を務めていた杉山和男（のち新日本製鉄副社長）は、この年の六月、情報産業振興議員連盟に所属する二人の自民党議員の応接を終えて一息ついていた。

三十日のこと、本省から

「至急、帰国すべし」

という命令が来た。

デュッセルドルフで三年目だったので、そろそろ別の機関か本省勤務に配属される時期だったので、慌てることもなく、

「十日間の猶予をいただきたい」

と返事をした。

帰国したのは七月九日である。まだ成田国際空港はできていなかった。

羽田から真つ直ぐ、大臣官房に帰国報告にうがったところ、七月一日付けで情報処理振興課という新しい課ができていて、その課長に命じる、ということでした。その足で電子政策課の平松課長のところに行くこと、

「いつから着任できるか」

というので、

「明日から」

と答えました。

それで七月十日付で辞令が出たわけでした。

シナリオとスケジュールはすでに書きあがっていた。

やや重複になるが、シナリオの大筋は平松が書き、詳細は情報産業室課長補佐の宮野素行が取りまとめた。このとき電子政策課に置かれていた情報処理政策班は、六九年六月にペンシルベニア大学の留学から帰った岡部敬（のち財団法人貿易保険機構理事）を班長として、「情報処理基本法」「情報処理振興法」（情報法）「電子計算機抵当法」の三つの案件が着手された。

当時のことを岡部が語っている。

作業の中心は、むしろ情報法で、情報処理振興計画、情報処理サービス業・ソフトウェア業の登録制度、プログラム調査簿、情報処理技術者試験の四本を柱とし、まずプログラムという言葉を法律上定義をするために米国の特許法の改正案をとりよせてプログラムの定義を調べたり、当時霞ヶ関ビルの中にあつたコンピュータサロンで数十冊の内外の電子計算機に関する本でプログラムの定義を調べて、

現在の情報法の定義を作り上げました。

悪戦苦闘で作りに上げた法案だったが、他の省庁から横槍が入った。

宮内庁の除くほとんどの省庁から、縦割り、横割りの要望があつた。そのすべてを聞いていたら、情報処理振興計画はまったくやせ細ってしまう。予算関連法案の提出期限が間近に迫っているのに、二月の末になつても郵政省、科学技術庁、運輸省が「絶対反対」で気が気じゃなかった。

課長の平松が折衝に向き、電話で修正か所を知らせてくる。ワープロなどというものはない時代で、すべて和文タイプで打って輪転機にかけるのである。

「部屋に輪転機を何台も並べ、修正が入るたびに原紙を直し、職員全員が床に紙を敷いて寝泊りした」  
という。

結局、法案名は

「情報処理振興事業協会等に関する法律」

ということになり、これが五月の国会を通過したのである。

情報処理振興課の課長に着任した杉山は、そのシナリオ

をスケジュールに沿って実現していくことが仕事になった。業務班長の山路、総括班長（課長補佐）の岡部を含め、職員は全部で九人。課としてまずやらなければならないのは情報処理振興事業協会の発足だった。発足させるには基金を集めなければならない。

二

杉山の回想――。

初年度の運営基金の予算は四億円で、政府と民間から半分ずつということでしたから、民間から出捐金を集めるのが第一の仕事です。

夏の暑い盛りにネクタイを締めて、各業界団体の事務所を回り、趣旨を説明するのですが、まだソフトウェアという言葉自体が馴染みのないころですので、それを理解してもらおうが大変でした。アパレルとかファッションと間違われるケースもあったほどです。

通産省の所管以外の業界団体の事務所は初めて行くところも多く、ドイツでは冬物の背広しか持っていなかったのでも多く、これを着込み、タクシーで駆け回った記憶が強烈です。

ヨーロッパで三年を過ごしていた杉山には、久しぶりに体験する日本の夏はたまらなかつたであろう。蒸し暑いだけでなく、冬物の背広にネクタイということを知りただけでゾツとする。

「情報課の仕事の第一印象は、暑かつた」に尽きます」というのもよく分かる。

業務班長の山路も資金集めに動いていた。

経団連の産業部に出資金集めのノウハウを持っているセクションがありまして、コンピューターのユーザー業界から出資してもらうことにしたわけです。そこで建設事業協会、銀行協会、鉄鋼連盟、電気事業連合会などそれぞれに出資割当案を作ってもらいまして、それをもとに手分けをして、ちょうど夏の暑い盛りでしたが、各団体へ行きました。

このあたりは植村甲午郎や稲葉秀三などが根回しをしたであろう。

午後五時過ぎに行きますと、各団体ではちょうど暑氣払いか何か始まるところで、女の子に

――あ、寄付の話ですか？

なんて軽くあしらわれた記憶があります。

通産省の課長以下、課員をあげて資金集めに駆け回ったというのは、おそらくかつてなかったことに違いなく、またそれ以後も聞いたことがない。強いていえば八五年度にスタートした「ソフトウェア生産工業化システム開発」プロジェクトがそれに近いが、そのときは通産省とIPAが説明会を開き、いわゆる「奉加帳」が業界の中を回った程度だった。

七〇年の夏、通産官僚たちはまさに汗を流していた。

資金集めとともにIPAのオフィスも決めなければならなかった。その仕事は政策班長の岡部が担当した。

「時代の先端を行く立派な団体にしたいので、通常のナンバーのついた森ビルより良いところにした」

そう思った岡部は虎ノ門、新橋、浜松町の界隈を歩き回った。霞ヶ関ビルという手もあったが、日本経営情報開発協会、日本情報センター協会が入っていたので、ここに情報処理振興事業協会の本部を開設することは憚られた。関係機関が過度に集中するのは好ましくない。

探しに探して半ば諦めかけていたときだった。

情報処理技術者研修センターから

「スペースが空いている」

という知らせが入った。

国電浜松町駅前の国際貿易センタービルである。

何階が空いているのかとビルを訪ねると、管理事務所は

「すべての階が埋まっています」

と言った。

国際貿易センタービルは当時、羽田にモノレール一本で行ける便利さから人気があって、そうそう空きがあるはずもない。

研修センターに問い合わせると、

「うちが借りているスペースに余裕があるんです」

ということだった。

あとはビルの所有者と話をつければいい。

こうして初年度の運営に必要な民間からの出捐金は、目標の二億円を上回る二億九千万円が確保でき、オフィスも決まり、情報処理振興事業協会の発足にめどがついた。

十月一日に情報処理振興事業協会が無事発足したのも束の間、情報処理技術者試験への対応に迫られた。六九年十一月十六日に東京と大阪で実施された第一回試験はテストケースであって、資格試験ではなかった。

——ソフトウェア技術者が自分の技能レベルを確認する

目安。

という位置づけだったが、今度の試験は法律に基づいた

国家資格試験である。

当時、通産省が行っていた資格試験は計量士、電気工事主任技術者などで、受験者は多くても一千人程度だった。ところが六九年にテストケースで実施した第一回情報処理技術者試験には、予想をはるかに超える四万人が殺到した。あわてて近隣の小学校の教室を手配し、地域通産局の職員を試験官に駆り出すなどの応急措置を取るなどバタバタした。

なぜ小学校を試験会場にしたかという点、大学紛争のためだった。六九年一月の東大・安田講堂攻防戦をピークに大学紛争は沈静化しつつあったが、例えば七〇年三月三十一日に「赤軍」を名乗る過激派学生が日航機「よど号」をハイジャックして北朝鮮の平壤に着陸するなど、世情はいまだに騒然としていた。

そういう中で全国の主要都市に計数万人を集めて試験を実施するのである。騒擾を画策するには、不特定多数の人が集まる場所というのは都合がいい。

「警備をよろしく願いたい」

警視総監の秦野章に言いに行ったのは平松守彦である。

試験会場の手配と警備ばかりではない。第一回るときもそうだったが、資格試験制度の説明を全国で行っていく。

そのうえで各地方通産局で受験願書など必要な書類を配布

するのだが、そうした資料の類もすべて情報課で行わなければならなかった。

第一回試験を担当した関利男は、電子政策課情報処理振興班に所属していた。試験要綱が公示されると、説明会場はどこも超満員となり、受験願書が毎日三千通以上、ほぼ半月にわたって霞ヶ関の通産省に届けられた。

応募者は上級プログラマーを対象にした「一種」が一万九千人、初級プログラマー向けの「二種」が二万三千人だった。

のちに関は次のように語っている。

受験票の受け付け整理は人海戦術にならざるを得なかった。「情報処理」と名乗った課でありながら、コンピュータを使って処理する体制になかった。試験会場は大学が紛争のために使えなかったり、過激派の妨害が予想されるため高校や中学校、小学校の教室を借り、一校に千人ずつぐらい割り当てていった。申し出を受けた学校側も初めてのことで、どういう試験かというそもそもから説明しなければならなかった。

試験問題は大学の先生たちを極秘のうちに集め、月曜日から土曜日まで、夜間に作業をしてもらった。ポツになった候補の問題や原本を紙袋に詰めて自宅に持ち帰り、日曜

日になると近くの休耕田で燃やしました。  
毎週日曜になると小一時間、何か書類のようなものを燃やしていたわけですから、定めし怪しげな光景だったと思います。

七〇年十一月に行われた第二回の試験は、この経験が生かされ、比較的円滑に実施された。担当したのは情報振課発足と同時に鉄鋼業務課から配転された松本久男（のち財団法人データベース振興センター事務局長）である。「指導班長」という肩書きだった。

試験問題の作成までは前年の経験がたいへん生きました。しかし第二回目の試験は国家資格に直結するので、採点に最大の注意を払いました。通産省の中庭にプレハブの作業小屋を建て、ここで問題の作成から採点までやったのです。大学の先生方や研究所の연구원、コンピュータ・メーカーの専門家などに委員を委嘱し、夕方から深夜までが「一番」でした。この作業が七三年まで続きました。

### 三

松本が「七三年まで続いた」というのは、情報処理技術

者試験の事務処理方式が変更された、という意味ではない。松本本人が貿易局に異動して、試験制度から離れたに過ぎない。実をいうと手作業による処理は八四年まで続いていたのである。

一九八〇年に試験係長として情報振課に赴任した守屋美代子（のち日本情報処理開発協会情報処理技術者試験センター関東支部）の証言がある。彼女は総務課勤務が長く、局長付、次長付の職員として事務をこなすかたわら、統計処理の手伝いなどをやっていた。

「原課への配属は初めてで、たいへんに緊張しました。情報処理技術者試験の業務というのは、説明を聞いているうちに、何やらないへんなどころに来てしまった、と思っただものでした」

情報処理技術者試験はスタートした数年は応募者が四万人を上回った。だが以後、やや減少に転じた。

省内では  
——手間と時間はかりかかる。金食い虫。  
などと陰口をさかれるようになっていた。

七五年の応募者は「特種」「二種」「二種」合せて二万六千人だったから、四割も減少していた。ところがオイルショックの不況を境に資格取得が就職や職探しに有利ということから、応募者が増加に転じ、守屋が着任した八〇年は

応募者が六万八千人と過去最高を記録するようになっていた。

国の予算というものは、過去の実績に基づいてつく。二万六千人に相当する予算で六万八千人の書類を処理しなければならぬ。

「にもかかわらず、実際に事務処理に当たっているのは班長と係長と日本情報処理開発協会からの出向者である調査員の三人と聞かされ、びつくりしました」

なるほど、驚かないほうがおかしい。

問題の作成や採点は多くの試験委員、採点者によって処理されていたのだが、それでも三人は三人でしかない。しかも班長は技術者試験にかかりつきりというわけではなかった。だからこそ守屋が専任の係長なのだが。

オフィスの一角に、完全に仕切った「部屋」が作られていました。といっても、関係者以外、立ち入り禁止でしたから、通産省の職員でも知らない人が大勢いたと思います。そこには試験の後、解答用紙がびっしり詰まったダンボール箱が天井まで積上げられていて、人が二人、立ったままやっとう入れるかどうか、という隙間しかなかったんです。

この話は、筆者は知らなかった。

赤尾嘉治は日本情報処理開発協会から出向して、八二年四月から八四年十二月まで情報処理技術者試験を担当した。

「トレーナー姿で毎日山登りと重量挙げをさせていただけ、健康的な日々を過ごしました」

と冗談交じりにいう。赤尾は並行して、システム監査基準策定委員会の仕事をした。

もう一つ、事務処理に投入された予算は、三年前の実績で算出されていた。応募者、受験者が年率二五％で伸び続けていたのに、予算は三年前の実績に基づいていた。それでは足が出てしまう。アルバイトを雇うこともできず、結局、職員だけで事務処理をこなすことになった。

プレハブの小屋での作業は、八〇年の時点でも変らなかつた。クーラーはなく、真夏は扇風機で生ぬるい風を送り、真冬にはさすがに石油ストーブが手当てされたが隙間風で指先が凍えた。

何もかもが手作り、手弁当の時代だった。



~~~~~ 補 注 ~~~~~

情報化 この言葉は梅沢忠夫(うめざわただお/1943)が一九六三年一月発行の雑誌「放送朝日」に掲載した論文『情報産業論』が初出。六九年四月、林雄二郎(はやし・ゆうじろう/1916~2011)が『情報化社会』を出版した。

情報処理振興事業協会等に関する法律 法律の名前に「等」の文字を入れたのは平松守彦の苦肉の策だった。情報サービス企業への助成事業のための登録制度や情報処理技術者試験制度など、所管未定の施策が少なくなかった。平松守彦によると「それぞれ個別に法律を作っていたのでは間に合わず、その後の運用が煩雑になると考えた。そのため『等』の一字で一括した」という。

世界貿易センタービル 都電浜松町車庫があった。その跡地を利用し、羽田空港まで連絡するモノレールと国際オフィスビルを建設する「東京ターミナル構想」に基づき六七年から工事が始められ七〇年三月に完成した。高百五十二メートルは当時東洋一の高さを誇った。

秦野 章 はたの・あきら1911~2002。

神奈川県に生まれ日本大学法学部を出て警視庁に入った。六七年私大出身者で初の警視総監に就任、七四年参院議員となった。八二年中曽根内閣で法相を務めた。「政治家に徳目を求めるのは、八百屋で魚をくれというのに等しい」などの発言で物議をかもした。

# 日本IT書紀 190 情報化元年

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。